

NAGASAKI 9th DELEGATION



平和祈念像



吉田先生の勉強会にて



報告会にて

私たちの軌跡
～15は密～



平和祈念式典にて



浦上天主堂



出前講座にて



国連事務次長 中満泉氏と意見交換会

7 Q&As ABOUT US

ナガサキ・ユース代表団 に関する7つの基本

Q1.

ナガサキ・ユース代表団って何?

「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC)（右ページ囲み参照）が主催する人材育成プログラムです。2013年に第1期の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核兵器や平和の問題を実践的に学び、この分野で活動する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。被爆から76年が過ぎ、被爆者無き時代の到来を見据えての被爆地からの核兵器廃絶のための発信に貢献する若者が育つことを願ってのプログラムです。

Q3.

費用は誰が負担するの?

A. 活動にかかる費用は、勉強会の開催や報告会の開催、報告書の作成等基本的に核兵器廃絶長崎連絡協議会が負担します。また、活動内容に海外での活動が含まれる場合は、渡航費および滞在費として一人当たり最大で20万円の補助金が支給されます。海外への渡航に際し20万円を超える部分は個人負担となります。

Q2.

誰が応募できるの?

A. 募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤の大学生・大学院生、および同程度の年齢の若者です(18~25歳を目安)。高校生(応募時)は不可。国籍は問いません。核兵器問題をに関心があり、本プロジェクトの活動を通して、こうした分野での知識や経験を得たいと希望する若者、公式の活動期間(任命時から翌年8月31日まで)が終了した後も何らかの形で『核兵器のない世界』の実現のための活動にかかわっていく意欲のある若者を求めます。大学での学部や専攻等は問いませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力は必須です。また、活動に求められる知識を得るために勉強会や、企画、準備のためのミーティングに原則すべて参加可能で、他のメンバーと協力してプログラムに積極的に参加する姿勢が求められます。

Q4.

誰がメンバーを選ぶの?

A. 選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などが書面審査されます。2次審査は日・英による面接です。長崎大学及びRECNAの教員だけではなく、他大学の教員・英語のネイティブスピーカー、長崎県、長崎市の担当者の参加も得て審査を行います。

Q5.

核問題を専門的に勉強して いなくても大丈夫?

A. 大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）の教員に加え、元外交官や国連の軍縮担当者など学外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。9期生の場合は、任期中に約30回の様々な勉強会と集中講義を受講しました。

Q6.

具体的な活動内容は?

A. 大原則は『自分たちのプログラムは自分たちで創る』です。9期生はコロナウィルスの拡大による渡航制限やニューヨークでの核不拡散条約(NPT)再検討会議の延期により、当初の活動計画を大幅に変更することになりました。結果として主にインターネットを使っての様々な活動を展開しました。核軍縮と平和に関する国際的なセミナーやシンポジウム、ウェブ会議への参加、オンラインでの国際プレゼンテーションの主催、そして核軍縮の分野で活動している様々な人々との交流動画の配信などです。そうした活動はまたSNSを使って発信され、多くの人々に共有されます。参加者一人一人が自分の興味や関心、目標に沿って、オリジナルな活動プランを立てていく、というのがナガサキ・ユース代表団の活動の醍醐味と言えるでしょう。

Q7.

任期後の予定は?

A. 長崎県、長崎市、長崎市民及び一般市民の方々への活動と成果の報告を行い、8月末の任期満了を迎えた後は、「ナガサキ・ユース代表団」のメンバーとして活動する義務はありません。しかし、一人一人が自分の経験を活かし、何らかの形で核兵器の問題に関わっていくことが奨励されます。実際に、ナガサキ・ユース代表団のメンバーだった学生には、全国での平和教育の出前講義や講演、取材、また国際交流イベントへの参加などの依頼が多数舞い込みます。義務ではありませんが、核兵器廃絶長崎連絡協議会からそれらの依頼への協力を要望されることは珍しくありません。また、核兵器廃絶長崎連絡協議会やRECNAが主催する核問題のセミナーやシンポジウム等、様々なイベントに参加することで、さらに知識や経験を積んでいくことも可能です。ナガサキ・ユース代表団での経験を踏まえて、大学院で核問題を専門に学ぶ道を選んだ人もいます。

『核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)』って何?

「長崎が核攻撃を受けた人類最後の都市に」と願う長崎県民、市民のため、長崎県、長崎市、長崎大学の三者が一体となって、核兵器廃絶に取り組むための枠組みを構築することが検討され、2012年10月4日に核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)を設立いたしました。また、一般会員の長崎県、長崎市、長崎大学に加え、長崎平和推進協会及び国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館も特別会員として参画しております。

過去から現在、そして未来に続く学び

川尻 ゆい (長崎大学大学院教育学研究科2年)



私は活動する中でもっと知りたい・必要であると感じた情報を得るために、核兵器をめぐる専門家の方々に依頼して、講演をしていただきました。1回の勉強会に約2時間、総数27回の勉強会を行いました。そこでは被爆体験講話、平和教育、核兵器をめぐる日本と世界、原発についてなど幅広い分野からの学びを得ることができました。勉強会を通じて感じたことは、この問題について知らないことが多くあること、現状に満足するので



ではなく更に学び続けていくことの重要性です。そして核兵器廃絶を主張する際にどうしてそう願うのか根柢となる部分を述べるためにしっかりと知識を持っていかなければいけません。更に私たちは勉強会後に自分たちが感じたことをシェアする時間を設けることで、新たな視点を得ました。また、私たちが得た情報や知識を発信することで多くの人が平和や核兵器廃絶のことに目を向ける活動へとつなげました。



NAGASAKI



長崎で学ぶ

村上 文音 (長崎大学多文化社会学部2年)

長崎原爆資料館や軍艦島、岡まさはる記念長崎平和資料館などを巡った長崎研修を通して、新たな視点と学びを得ることができました。長崎が持つ加害の顔と被害の顔。国際社会における核兵器の情勢を理解するにあたって、学校教育で提供される知識だけでは不足している側面を目の当たりにしました。何度も聞いても、何度も見ても慣れることがなく、新たな発見がある。それが原爆の記憶であると感じています。生涯にわたって学び続けたい。そんなことを感じた経験となりました。



明確な正解が存在しない、学べば学ぶほど分からなくなる課題と向き合うことは決して楽ではありません。ユース代表団として学ぶ中で、壁にぶつかることも多くありました。しかし、大好きな仲間たちと共に任期を全うできたことをこころより嬉しく思います。本当に地道ではありますが、グローバル化社会で生きる一人の若者として、大きな成長を遂げられたことを確信しています。



被爆遺構を通して感じたこと

大園 穂乃佳

(長崎県立大学地域創造学部2年)



私たちは長崎研修と広島研修を通して多くの被爆遺構を巡りました。長崎研修では、被爆当時の地層や被爆クスノキ、城山小学校の被爆校舎などを巡りました。広島研修では、原爆ドームや実際に被爆した小学校を巡りました。研修を通して多くの被爆遺構について学んできましたが、私が被爆遺構巡りを通して感じたことは、「当時、私たちと同じ人間の暮らしがそこにはあった。」ということです。被爆当時の地層には、原爆が投下されたあの日、そこで暮らしていた人が使っていた茶碗がそのまま今も残されています。今を生きている私たちと何一つ変わらない人間の暮らしがそこにはあったのです。被爆遺構は被爆 76 年が経った今でもあの日に起こった出来事を語り継ごうしてくれているものです。76 年が経った今でも、あの日と変わらない場所に存在し続けている被爆遺構を見て、「あの日、きのこ雲の下では一体何が起きていたのか。」について改めて考える機会になりました。



HIROSHIMA

継承する者として

中村 楓

(長崎大学多文化社会学部3年)



新型コロナウイルスの影響で、3回に
人数を分散してとなってしまいました

が、3月末に1泊2日で、広島に行きました。世界で最初の被爆地となった広島は、長崎とはまた異なる視点から世界に平和を訴えているように感じました。例えば、平和記念資料館では、「命の重み」を心に訴えかけられたという印象を受けました。あの日の時、原子爆弾の下では私たちと同じ1人の人間が暮らしていたということ。私たちと同じ当たり前の日常があった。ということを伝えていると感じました。核兵器を廃絶するためには、核兵器が引き起こした悲惨さを伝えるだけでは難しいかもしれません。しかし、この人間に焦点を当て



るという視点は、核兵器廃絶においても、現代の社会においても、忘れてはならないことだと感じました。その他にも、被爆した小学校や、ヒロシマ平和メディアセンター、大和ミュージアムを訪れました。戦争が何を引き起こしたのかを知り、戦争を繰り返さないために活動されている方々のお話を聞き、自分たちは何をすべきか考えるきっかけとなりました。



PACEY AWARD

同世代の若者と繋がる

世界と繋がる 藤田 裕佳

(長崎大学多文化社会学部3年)



私たちは様々なイベントに招待をしていただき大変貴重な経験をさせていただきました。私が最も印象に残っているのが、日本全国の若者やマレーシアの大学生と交流を深めた「国際青年平和フォーラム」です。このフォーラムでは、被爆地ナガサキにおける原爆投下の歴史を継承する上でのアプローチ方法を話し合い、最終的に長崎市長への提案として提出するものです。全国各地で同世代の人たちが核兵器廃絶へ向けて平和継承活動を行っていることを知り、核兵器を無くすために活動しているのは決して私たちだけなのではないと大変励みになりました。また、コロナ禍の中で主流になったオンラインでの繋がりは、私たちの活動の幅を大きく広げてくれるものとなりました。ヨーロッパの核兵器廃絶 NGO が主催する "PACEY AWARD" では、実際に私たちの活動を英語で紹介し、他の団体の活動内容を知ることで「核兵器は無くすべきである」という世界共通の認識を再確認することができました。コロナ禍で日常を奪われ、思ったように活動できませんでしたが、「ピンチをチャンスに」という言葉を胸に、さらなる可能性を広げていきたいです。



オンラインイベントで世界に発信！？

鈴木 直緒 (長崎県立大学経営学部4年)





私は、オンラインイベントの開催と参加のどちらにも多く努めました。まず、「核兵器は毀滅(きめつ)、思いは不滅」と題して約2時間のオンラインイベントを開催しました。9期生は、これまで学んだことの共有だけでなく参加型のワークショップも行い、日本人の若者だけでなく被爆者の方々や国外の若者まで広く40名以上ご参加いただきました。そこでは例えば、各々が、今考える「平和」についてや「平和教育について」違いがあるのかどうかを自由に描いて意見交換を行いました。この様に、交流も兼ねて参加者もアクティブに行ったため、新しい取り組みとして好評をいただきました。また、私は個人的にはイベントのファシリテーターとして多くの経験を得られました。そして、国内外多くのオンラインイベントに一般としてや、パネリストとして参加し多くの学びとネットワークを拡げることが出来ました。この様な国籍、世代など多くの壁を超えた活動を経験することが出来ます!

Online event



「平和」と言われて何を思い浮かべますか？



さらなる「若い世代」への継承 山口 稔由（長崎大学多文化社会学部3年）



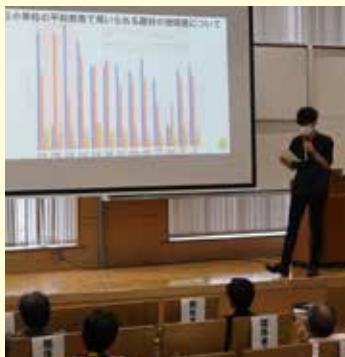
私達は、重ねてきた勉強会や研修の経験をもとに、主に小中高校の生徒の皆さんに、出前講座も行いました。講座では、私達が一方的に話すだけではなく、生徒の皆さんとのアウトプットの時間も大切にすることを意識しました。例えば、「どうしていまだに核兵器は存在しているの?」「核兵器はなくすべき?持つべき?」ということについて、少人数のグループで話し合い、発表するディスカッションの時間や、「平和とは?」というテーマで絵を描くアクティブラーニングなどを実際に行いました。また、被爆者の方に比べ、年の近い私達から話をすることで、自分たちにも何かできるのではないか?と感じてもらうことに繋がったかと思います。これまで行われてきた、過去について学ぶ平和教育はもちろんのこと、そこから発展させて、もっと未来に向けて一人一人が主体となって考えてもらう、良い機会を作ることができたと思います。



Presentation

平和教育の現状から考える、未来のカタチ

有吉 亜樹人（長崎大学医学部医学科3年）



私はナガサキ・ユース代表団の任期を通して主に調査を担当しました。今回の調査では平和教育の頻度と題材に地域差があることがわかりました。詳しくは HP に紹介している調査レポートに書きましたが、現代の平和教育の現状を定量的に見た時、私はこの結果には疑問と不安を感じました。平和教育は、子供たちが成長する過程で戦争の概念を理解してもらう手段として必要不可欠であり、価値観の形成に大きく影響するものです。被爆者の方々が先頭に立ち原爆の歴史を伝えてくれたからこそ、長崎では平和教育が盛んにおこなわれてきました。被爆者の方がご存命ではなくなった後の世界で、長崎の平和教育はどうなるのでしょうか。日本は今の平和教育の水準をこれ以上落とさずに保つことができるでしょうか。今後、戦争体験者からお話を直接聞けない世代が生まれてきます。その子供たちに戦争の歴史を伝えるにはどうしたらよいのか、考えいかなければならぬと改めて感じました。

SNS

SNS を通して考える 宮本 光（長崎外国語大学外国語学部3年）



私たちは、Instagram、Facebook、Twitter、公式ライン、YouTube などを通じて活動をしてきました。私が SNS 活動を通じて学んだことは 2 点あります。一つ目は、若者に平和活動や核兵器問題について、考えてもらうためには、私たちが発信したいことではなく、見る側が知りたいことを発信することが重要であるということです。その例として、6月に開催したオンラインイベントでは、若者の参加者数が少ないという問題点から、インスタライブでの告知を始めました。そこでオンラインイベントの開催目的や魅力を自分達の声で発信したところ、オンラインイベントで学ぶ意味を感じもらうことができ、若者の参加者数を増やすことができました。二つ目は一緒に働きかける仲間の大切さです。SNS 活動を始めてから、想像以上に核兵器廃絶を訴えて行動に移している学生団体や NGO 団体の存在に気づくことができました。なかなか答えを見つけられない問題だからこそ、同じ想いの仲間と協力し、小さな力を集めて大きな力に変えていくことが核兵器廃絶に向けての取り組みでは必要になってくると考えます。SNS を活用し、ナガサキ・ユース代表団の活動や情報を発信し続けることで、今まで考えてもこなかった平和や核兵器問題というトピックについて、考えることができます。SNS を通じて、日本だけではなく世界に向けても発信していく、可能性を広げていきたいです。



OG&OB VOICE



中島 大樹 6・7期生

(長崎大学大学院多文化社会学研究科修士課程2年)

当初、僕がナガサキ・ユース代表団に応募した最大の動機は「国連に行けるから」というものでした。もちろん、原爆や核兵器のことまったく関心が無かった訳ではありませんが、正直に言うとそうしたことは後付けに過ぎませんでした。そんな興味本位から始まった核問題との出会いでしたが、今ではそれを契機として大学院で研究の道に進んでいます。要するに、極端なことを言えば、僕はきっかけは何でも良いと考えています。これは僕が今、大学院にまで進んだからこのように言えるのかもしれません。僕のように、2期務め、大学院進学をする人は後に先にも僕くらいかもしれません。でも、きっかけが何であろうと、将来、自分の子どもに原爆について聞かれた時にちゃんと答えられた方がいいので、その上でユースの活動は実りあるものとなると思います。長崎で生まれ育った人、大学進学を機に長崎に来た人、背景は様々だと思います。ただ、一番大事なことはみなさんが今、長崎にいて、ナガサキ・ユース代表団という新たな経験のステージに立つ切符を持っていることだと思います。活動の中では必ずしも明るい侧面ばかりではなく、一定の責任も生じることでしょう。しかし、だからこそ任期を終えたころには何らかの成長を見込めると思います。そして、それは皆さんのみならず、長崎にとってもポジティブな影響をもたらすこととなるのは忘れないでください。

篠島 葵 8期生

(長崎大学環境科学部4年)



平和や社会問題に興味はあるものの、何もできない自分にもどかしさを感じていました。そんな中、友達の紹介で知ったのがナガサキ・ユース代表団です。私は環境科学部2年次に8期生に応募し、1年間活動しました。ナガサキ・ユース代表団では、自分たちの「知りたい!」「やってみたい!」を軸に活動内容を企画し、実現していきます。8期生では、勉強会やイベント開催、海外の学生との交流などを企画しました。こうした活動を通し、新しい知識や考えを得られたのはもちろんのこと、他のメンバーと協力して「思いを形にする」行動力も身につきました。核兵器をなくすにはどうするか、なぜ歴史を学ぶのか、どんな未来を生きたいか、そんな正解のない問いについて仲間と語り合う中で、自分にできること(選択肢)が少しずつ見えてきた気がします。仲間との出会い、幅広い年齢層や国内外の方との出会い、新たな学びや考え方との出会いなど、色んな「出会い」を通して、自分が知る世界とは違う景色が見えてくると思います。ぜひ不安をワクワクに変えて一步踏み出してみて下さい。

■ 編集発行責任

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

※PCU-NCは、長崎県、長崎市、長崎大学の3者による核兵器廃絶のための協議体。

核兵器廃絶
長崎連絡協議会
PCU-Nagasaki Council



高見 すなお 7・8期生

(長崎大学多文化社会学部4年)

私は大学1年次から3年次にかけてナガサキ・ユース代表団7・8期生として活動しました。活動を通して人生の財産とも言える学びを得ることができたと感じています。代表団には大学や学部、学年、出身地など様々で、各々の背景を持つ若者が選出されます。代表団はたった8人ほどの集まりですが、お互いの“当たり前”や“正義”は全くもって異なることがほとんどです。そんな中で、「核兵器廃絶」という一社会問題に目を向けて、話し合いを重ね活動内容を決定していくことで、お互いの共通点や異なる点を発見し、協力し合う過程には数多くの、そして衝撃的な学びを得ることができます。こういった学びを社会に出て働く前である、学生時代に体感することができるることは他の大勢の学生と比べても大きいと思います。これから大きく変容を続けていくであろう現代社会の中で、自分の頭で考え、自分で行動を起こすことを主体的に経験できるナガサキ・ユース代表団の活動に皆さんもぜひ挑戦してみてください!



川村 和輝 8期生

(長崎大学大学院工学研究科修士課程2年)

私はこの活動を通し、人として大きく成長できたと思います。核兵器の問題は一筋縄ではいかず、世界情勢、環境、科学、権利など様々な問題と密接に関わり合っています。そのため核廃絶には正解がなく、国や地域、歴史的背景などによって考え方や思いが全く違います。こういった中でナガサキ・ユース代表団として世界中の方々と接することで、「平和とは何か」「自分が望む世界とは何か」を改めて考える良い機会になりました。また「正解のない問題」だからこそ、意見の異なる人に対してしっかりと耳を傾け、尊重し認め合うことの大切さを学ぶことができました。この活動は自分を見つめ直す素晴らしい機会になったと感じています。みなさんにとって核兵器とはどのようなものでしょうか?どこか遠い国や昔の話で自分とは関係ないと考えている方もいるかもしれません。是非そういう方こそ、ナガサキ・ユース代表団の一員として自分の興味がある分野から核兵器について学んでみてはいかがでしょうか?きっと大きな発見と学びがあると思います。

■ お問い合わせ先

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町1-14
(長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)内)

TEL: 095-819-2252 / FAX: 095-819-2165
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/pcu/>

「ナガサキ・ユース代表団」公式 Facebook ページ
<https://www.facebook.com/nagasakiyouth>

facebook

ナガサキ・ユース代表団

